協同の歴史の瞬間　第111回

賀川豊彦の「乳と蜜の流るゝ郷」（その15）

1935（昭和10）年5月号
鈴子、芸者だったことを告白する。
東助を排斥する動きが強まる。
1935（昭和10）年6月号
山津波等により村が困窮する中で
東助、その打破に挑む。

監修　**堀越芳昭**
山梨学院大学　元教授

東助と鈴子の結婚式で行方不明になった田中高子に関し、鈴子はその理由を高井米子から教えられる。高子が見つかったという情報が入り、鈴子ほか娘たちは高子の家に行く。そこで鈴子は、かつて芸者であったことを告白する。

それを聞いた高井米子は、鈴子がもと芸者であったことを村じゅうにふれ回る。村会議員、小学校校長を悩まし、青年会、処女会も東助を排斥するようになり、東助は青年団長を辞任し、組合の専務理事職をも平泉又吉にゆずらねばならなかった。

その時、大塩村を大雨、暴風が襲う。山津波等により村は壊滅状態になるなかで、改めて東助の力が必要だ、という声が出てくる。東助は、荒廃地回復のために土地利用組合を作ることとし、村人に提示し、実践に移していく。

鈴子、娘たちに芸者であったことを告白する

東助と鈴子の結婚式で処女会を代表して祝辞を述べる予定であった田中高子が書置きを残して行方不明になって大騒ぎになった。

鈴子は、高子を捜しに行った東助を産業組合で待っているうちに、高井米子から、初めて高子と東助の関係を聞かされた。

「そら、高子さんが自殺を思いつくのは当然ですわ。とっても白熱的だったんですからね……東助さんがあの人に熱心だっていうんじゃないんですよ、まあ片思いっていうんでしょうね。高子さんは、東助さんに、あなたのよう

ないい人があることを、まったく知らなかったらしいんですよ。それで、あなたと結婚すると、村の人に発表したもんですから、まったくがっかりしたものとみえますね。まあ、その気の落とし方ったらなかったんですよ。見る目もかわいそうだったわ。だけど、あなたが、少しもわだかまりなくお交際（つきあい）なさるものですから、少し陽気になっていたんですけれど、いよいよ、結婚式が近づいたんで、とうとう爆発したんでしょうね」

その言葉を聞いた鈴子は、新しい煩悶を持つようになった。

「わたし、どうしたらいいでしょうね。高子さんが、もう少し早く言ってくだすったら、わたし、あの人を、高子さんにおゆずりしてもよかったんですのにね」

そこにいた大井久子も津田良子も笑いだすとともに鈴子が超世間的な考えを持っているのに舌をまいてしまった。彼女等は、鈴子の半生を少しも知らなかった。

そこに「田中高子が見つかり、家に送り届けられた」という情報が入ってきた。鈴子が「わたし、お見舞いに行ってこよう」というと「わたしも」「わたしも」となって四人の女性が高子の家に行くことになり、夜の十二時近くに高子の家に着いた。

鈴子が高子に謝ると高子は泣き出し、それにつられて三人の娘たちも頭を伏せてしまい、しばらく沈黙が続いた。鈴子は顔を上げて次のように言った。

「高子さん、わたしたちは、まだ結婚式をあげたばかりで、肉体上の交渉は少しも持っていないんですから、もし、あなたがおよろしければ、わたしは、いつ何時でも、あなたにあの人をおゆずりしてもよいと思っているんですの……わたしは、なにもやせがまんでそう言っているんじゃないんですのよ。わたしはね、まだ皆様に申し上げていませんけれど、みなさんとは少し素性が違っておりましてね。人間には、あきあきしているほうなんですよ。こう言ってもおわかりにならないでしょうね。わたしはもと芸者をしていたんです」

そう言ったので、三人の娘たちはびっくりしたらしかった。みんな、思い合わしたように顔を上げて、鈴子の横顔を見つめた。

鈴子はもと芸者であったことを明らかにするが、これが東助を窮地に追い込んでいく。

東助を排斥する動きが強まる

その翌日、東助は、組合に出て、帳簿の整理をしていた。そこに鈴子がやってきて、簡単に言った。

「東助さん、わたし、産婆の試験を受けに、東京に、きょう出たいと思うのですが、どうでしょうね」

「そう？……行きたければ行ってらっしゃい！」

東助は、鈴子が、昨夜の騒動から少しすねていると思ったので、しいて反対しなかった。

そこへ、木内の老人がはいってきて、「孫娘がチフスと判断され、避病院に入れなければならないが、付いていく者がない。だれか頼める人ないかの」と相談する。

それを机のそばで聞いていた鈴子は、すぐ帳場に出ていった。

「おじさん、わたしでよければ、お世話いたしましょう……」(略)

鈴子は、すぐ木内老人のところへ、コールテン服のまま飛んでいった。そして、老人の孫娘妙子は戸板に乗せられて、一里近く離れた野原のまん中に、ぽつんと一軒だけ立っている避病院に運ばれた。そして、鈴子は、平気な顔をして、ひとり病人の看護に余念もなかった。

避病院とは、伝染病患者を隔離収容した病院で、鈴子はそこで看護したのである。

そんなこととは露知らぬ高井米子は、その日の朝から、鈴子がもと芸者であったということを村じゅうにふれ回った。彼女はまず第一に、村の助役である彼女の父の耳に入れた。父はびっくりして言った。

「まさか――どうして、東助がもと芸者をしていたような女とかかわりあいになれるものか考えてみいよ、あの女は、少しも芸者らしいところなんかないじゃないか」

「だって、おとう様、ほんとなんですよ。わたしは、あの人の口から直接に聞いたんですもの」

「そうすると、東助は、どうかしているなあ」

その話が村長に伝わり、村長から村会議員に、村会議員から小学校校長に、そして、小学校校長はそのうわさを聞いて、色を失ってしまった。

それは、もと芸者をしていたような者の媒酌を産業組合の理事がなし、その結婚式を小学校の講堂で、しかも校長の司会のもとに行なったと県庁に聞こえると、首になるかもしれないと心配したからであった。

こうした騒ぎは当然、青年会・処女会にも波及する。

その晩、平泉又吉の家で、青年団幹部有志の相談会が開かれた。そしてあくまで、東助を糾弾することに決定した。処女会でも、ほぼ同じ歩調を取る

ことに決まった。

東助の無二の友人島貫伊三郎が「平泉の野郎が妙な策動をしている」旨の忠告をしてくれたが、東助は案外、人の批評にたいして平気であった。

しかし、この結婚さわぎのために、村の組合運動は、一時まったく停頓してしまった。出資金の払い込みは止まり、春から始めていた養鶏組合の卵を組合に持ってくるものさえなくなってしまった。で、東助は、村の青年団長を辞任し、組合の専務理事の職をも、平泉又吉にゆずらねばならぬことになった。

こういうなかで東助は、しばらく退いて、村民の意識開拓のために農民協同組合学校を開く計画を立て、里村千代子女史に「武蔵野農民福音学校の藤島精一氏に大塩村に来てもらえないか」という依頼の手紙を書いた。

山津波等により村が壊滅的状態となる。東助、土地利用組合で村づくりに挑戦する

二週間目にやっと、「八月のお盆の農閑期に一週間だけ藤島先生が来てくれる」という内容の返事が里村女史から来た。

しかし、その吉報の着いた日の午後から、三週間以上少しもやまないで降っていた雨が、さらに大降りになった。コイ池はみるみるうちに氾濫して、小さいコイは、みなどこかに逃げていってしまった。それはまだよいほうだ。桧原から流れて来ている渓流はたちまち増水して、東助が小作していた三反歩の田は、水に没してしまった。

このあと暴風が村を襲い、わら屋根は飛ばされ、さらに山津波により村としての最上の田んぼ三町六反余が、砂と礫岩の河原となってしまうなど、村は壊滅状態となった。村の老若男女は、誰といわず産業組合の前に集まり、絶望の声をあげた。

こんなときになると、平泉又吉では、村の青年が承知しなかった。第一彼は、昨夜から、村役場の近くのカフェの女と喜多方町に芝居を見に行ったとかで、村にいなかった。それで、結婚問題で、ほとんど理由なく東助を排斥していた佐藤巡査までが、頭を下げて東助の家に頼みにきた。

「きみ、頼むがな、ひとつ片肌ぬいでくれんか……きょうまでの感情のいきちがいは、ひとまず預かりとしてさ、今は村の非常時じゃないか。さあ、こうなっちゃあ、どこから村を復興させてよいか見当がつかないんだから、ひとつきみの知恵を貸してくれたまえ、ね、きみ」

そうせがまれても、今度は、おいそれと引き受けることはできなかった。

ただ、東助は「まあ、考えてみよう」と、中心になることだけは預かりにして、村で最も緊急を要する屋根をなおすことに青年たちと取り組んだ。

そうした折に避病院を訪ねた東助に木内老人が、越後の長岡で見たこと、聞い

たことを話す。それは「信濃川の氾濫に苦しむ村民が、組合を作って砂を田畑からかつぎだして、元どおりになった土地を、村民の戸数だけに頭割りにして、耕作する」という地割と呼ばれているものであった。

それに暗示を得た東助は、その地割制度を現代的に、荒廃地回復の土地利用組合として、生かしてやろうと決心した。

彼はすぐ次の朝、斎藤朝吉の母屋を修繕していた青年団員の集まっているところへ走った。そしてその晩すぐに、小学校で村民大会を開く準備をした。（略）

その晩、村の戸主で、土地を大なり小なり流してしまったものはみな集まった。で、東助は、彼の計画を話した。

「地主さんは、いったんみんな村の産業組合に土地を貸してください。失地は五年間小作料をめんじてください。そして、小作人諸君は、かならず、土地を組合を通じて借りるようにしてください。ただし荒廃地の復旧事業にたいしては、村のすべてのものが、総がかりで土砂を運び出し、復旧した土地から小字の戸数に均等に分けて、耕作してもらうことにします。五年度になれば、地主さんには組合から少しずつ小作料を払うことにしますから、地主さんも安心してください」

東助が同じことを繰り返し繰り返し説明したので、よく趣旨は徹底した。地主も小作人も安心して帰っていった。（略）

翌朝未明から、村の青年はもちろんのこと、女も、老人も、子どもも（学校は一週間休みになった）みな、ふごと棒を持って、砂かつぎに出てきた。

新しい村づくりに向けて、東助が提案し、村民総ぐるみで動き出したのである。

＜参考文献＞
『家の光』（昭和10年5、6月号）
＊文章の引用部分は復刻版『乳と蜜の流るゝ郷』（2009年）を参考にした。